



農工通信



第 68 号



工学部12号館は、講座ごとに設けられていた実験室を、一体化した共用実験スペース(オープンラボ)とした。また、表情豊かな開放的な外観デザインとするため、雑壇状のテラス(オープンデッキ)を屋内の交流スペースと一体的に配置してある。

も く じ

- | | |
|---|---------------------------|
| ○あいさつ | ○同窓会、後援会のホームページ ……14 |
| 農学部長に就任して ……2 | ○美術サロン ……14,16 |
| 連合農学研究科長に就任して ……2 | ○創立50周年記念事業募金会報告とお礼 ……15 |
| ○学園だより | ○創立50周年記念事業募金会を終えて ……15 |
| 黄河下流域の土と水 ……3 | ○東京農工大後援会の活動 ……16 |
| 太陽電池のさらなる普及を目指して ……4 | ○平成13年10月1日現在の同窓会会員数 ……16 |
| 東京農工大学 TLO について ……5 | ○同窓会支部長及び支部連絡先 ……17 |
| ○部会・支部だより ……6 | ○掲示板 ……18 |
| ○クラス会だより ……8 | ○慶弔 ……18 |
| ○製糸学科から高分子工学科へ、
その生命工学科における絹の研究 ……13 | ○事務局だより ……18 |
| | ○編集後記 ……18 |

あ い さ つ

農学部長に就任して

農学部長 笹尾 彰



例年にない暑い夏も過ぎ、紅葉のたよりも聞かれる候となりました。

平成11年4月に大学院連合農学研究科長就任の任、農工通信を通じて同窓生の皆さんに挨拶をさせていただきました。この度、10月1日から上原前学部長の後を受けて農学部長の重責を担うことになりました。それに伴って連合農学研究科長の職を辞しました。あらためて就任と退任の挨拶をさせていただきます。

皆さんすでに新聞紙上でお聞き及びと思いますが、今国立大学が大きく変わろうとしています。

数年前から行われている行政改革の一環として、国立大学の独立行政法人化が現実のものとなりつつあり、15年あるいは16年からスタートする運びで文科省の調査検討会議から『新しい「国立大学法人」像について』の中間報告が出されました。さらに、今年の6月には「国立大学の構造改革方針」が出されました。その内容は、①国立大学の再編・統合を大胆に進める、②国立大学に民間の発想の経営手段を導入する、③大学に第三者評価による競争原理を導入する、というものです。当農学部も連合農学研究科のあり方も含めて、この方針への対応を迫られています。

このような局面を迎えて、皆様の一層のご協力とご支援をお願いするとともに、皆様の益々のご健康、ご活躍をお祈りいたします。

連合農学研究科長に就任して

大学院連合農学研究科長 國見 裕久



この度、10月1日付で笹尾彰科長の後を引き継いで東京農工大学大学院連合農学研究科長に就任いたしました。昭和48年農学部養蚕学科を卒業しました同窓です。

ご承知のとおり、大学院連合農学研究科は、本学を基幹大学として、茨城大学、宇都宮大学とともに運営している博士課程大学院です。歴代の研究科長、さらには構成大学の先生方の並々ならぬご努力により、1985年4月に設置されてから著しい発展を遂げております。これまでに課程修了生394名(内留学生169名)、課程を経ない修了者(論文博士)162名(内外国人8名)を世に送り出しております。また、在籍学生数も200名を越えており、こ

れら学生は3設置大学の教官の指導の下、日夜研究に励んでおります。

一方、新聞でも頻繁に報道されているように、現在国立大学のあり方が問われております。わが国の国際的な産業競争力の強化、経済の活性化と財政改革の観点からの構造改革の一環として、「国立大学の再編・統合等」が提起されております。連合農学研究科においても、本学における農学の教育、学術研究を発展させる方策について検討を開始したところです。このような舵取りの困難な時期での研究科長就任、身の引き締まる思いです。連合農学研究科の先生方、そして同窓の皆様方のご支援を得て、研究科の発展のため、ひいては本学の発展のために微力ながら精一杯努めさせていただきます。何卒よろしくご祈り申し上げます。

学 園 だ よ り

黄河下流域の土と水

大学院生物システム応用科学研究所 岡崎 正規

全長5,463.6kmの黄河の水が海に到達しなくなってから長い年月がたちました。始まりは1972年4月と言われています。あの大黄河の水が海に達しないうちに消えてしまうのですから、大変なことが起きています(写真1)。

氷河が削り、そして遺していった堆積物が風で運ばれて黄土高原ができましたが、その黄土は、炭酸カルシウムをたくさん含んでいます。黄河は、黄土を削り、そして運び、渤海を埋めて黄河下流域ができましたので、高いカルシウム含量の上に、海水中のナトリウム塩、カルシウム塩やマグネシウム塩がさらに加わりました。したがって、黄河の下流域に分布する土壤は塩類濃度が高いのです。

黄河下流域の農業地帯は、数千年にわたって中国の人々の胃袋を満たすための一つの重要なパンカゴでした。しかし、数千年の農業の展開は、少しずつ土壤の表面に塩を集積させる結果をもたらせました。塩類集積です(写真2)。この地域の降水量は年間600~700mmです。土壤表面からの蒸発量と作物が必要とする水を合計しますと1200mm位になりますので、年間500~600mmが不足していることとなります。この不足分を補うために、これまでは地下水を用いて灌漑してきました。小規模であっても永い年月にわたる灌漑は、地中深くに含まれていた塩類を土壤表層に集める結果を招いてきました。

小麦やトウモロコシは、一般には塩に強い方の

植物です。しかし、土壤の塩濃度が高すぎますと十分に生育できず、収量が少なくなりましたので、塩に強い(耐塩性)品種が導入されました。世の中はいつも好都合にはいきません。塩に強い品種は、収量が上がらなかつたり、味がもう一つよくないことがあるのです。

黄河は、乾燥地帯を通り抜けます。黄河中流域の乾燥地帯での農業は、黄河から取水し、灌漑水を直接、たくさん使います。蒸発する量は降水量とほぼ同じ量ですから、小麦やトウモロコシの水分となる量を与えなければなりません。開放経済の下で、多くの人たちが内陸部の都市に住むようになり、大量の水を必要とします。また、開放経済は、内陸部の工業発展を促進し、さらに大量の工業用水を黄河から求めることになりました。こうして、黄河の流れが消えて、黄河断流という現象が1年に200日以上も続くこととなりました。

このように、黄河の水が下流域にやっこないことは、意外と思われるかもしれませんが、この地域の土壤の塩類濃度を低下させ、塩類集積を低減させる方向に向かわせました。地下水位が高いと地中の水と灌漑した水がつながり、地中深くにあった塩類を地表に押し上げますが、二つの水が断ち切られることによって地表面への塩類集積が少なくなってきたのです。しかし、その一方で、水が不足することになりましたので、小麦やトウモロコシは乾燥害に見舞われやすくなっています。わが国は、約3,000万トンの農産物を輸入して

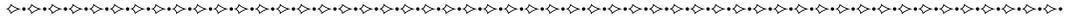


写真1 黄河下流域では、断流のために、歩いて黄河を渡ることができる



写真2 黄河下流域の塩類集積

いますが、穀類の輸入が最も多く、穀類のうちの60%が主として飼料用のトウモロコシで、200万トンを中国から輸入しています。飼料用のトウモロコシがなければ、わが国の畜産は成り立ちません。黄河下流域の出来事は、私たちの毎日の食べ物に直接影響しています。



太陽電池のさらなる普及を目指して

電気電子工学科 助教授 上 迫 浩 一

近年、エネルギー問題、環境問題を背景として、クリーンなエネルギー資源が注目され、太陽光発電や風力発電などの自然エネルギーを利用する新エネルギー技術が実用化され、広く普及が推進されています。太陽光発電においては、その心臓部に「太陽電池」と呼ばれる半導体素子が使われ、太陽からの光エネルギーを電気エネルギーに変換(発電)しています。最近では、住宅の屋根やビルの屋上、さらにはバス停の表示灯や道路上の点滅ランプなど、身近なところでこの太陽電池が使われ、次第に生活の中に溶け込んできています。

この太陽電池に使われている原材料は、現在ほとんどが「シリコン」で、今の情報技術(IT)を支えている半導体素子の原材料と同じものです。シリコンはまた我々の住む地球を形成している元素の中で、酸素について2番目に存在量が多い元素です。

太陽光発電に利用する太陽からのエネルギーに注目しますと、1分間に地球上に降り注ぐ太陽光エネルギーは、全世界の消費エネルギーの1年間に相当します。別の表現をしますと、地球の全砂漠面積の4%程度に太陽電池を設置すれば、全世界に必要な電力を供給することができます。

太陽光発電の特徴は、必然的に大面積が必要なことと、天候の影響を受け易いことです。現在太陽電池材料に始まり発電システムに至るまでいろいろな面で技術開発が行われています。太陽電池

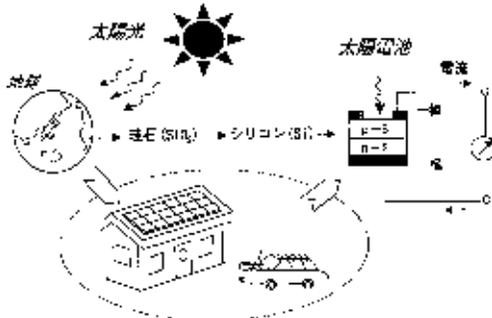
現在、黄河全体を統括する、国レベルの委員会がつくられ、黄河の水利用を計画的に進めることが話し合われています。できる限り早く、黄河流域全体の水利用が合理的にできるようにと望んでいます。

製造面での大きな技術的課題は、エネルギー変換効率を高め安定化することと、発電コストを下げることです。シリコン太陽電池の変換効率については、理論効率28%に対して、実用レベルで9~17%程度となっています。発電コストは、現在の電気料金の3倍程度と高いのが現状です。コストについては、量産化が進めば進む程下がると予想されています。

太陽電池は形状的には、その厚みによって大きく2種類に分類されます。つまりバルク型(0.3mm程度)と薄膜型(数 μm 程度)で、製法も大きく異なります。現在市場で主流となっているバルク型(単結晶シリコン太陽電池、多結晶シリコン太陽電池)ですと大面積の太陽電池を供給するのに膨大な量のシリコン材料を必要とするので、将来は薄膜型(アモルファスシリコン太陽電池、微結晶シリコン太陽電池)が有望であると予想されています。

アモルファス(非晶質)とは、シリコン原子が不規則に並んだ固体であり、微結晶とはアモルファス状態から部分的にシリコン原子が規則的に並んだ(結晶化した)固体を言います。対象となるシリコン薄膜(材料)は、厚みが数 μm 以下であり、これを作製するには、原料として分子状のシランガス(SiH_4)を用い、これを分解してガラス基板上などにシリコン原子(Si)を積んでいく方法を用います。シリコン薄膜太陽電池の製作で、プラズマCVD法と呼ばれる、2.45GHzの高周波による放電プラズマを利用して原料ガスを分解する方法が実用化されています。

アモルファスシリコンには、光を照射すると電流が減少する光劣化と呼ばれる特有の現象があり、太陽電池の性能を維持するためにはこれを抑制することが重要な課題となっています。当研究室では水素ラジカル(原子状水素)によりシリコン原料ガスであるシランを分解してシリコン薄膜を作製する方法を提唱しています。これまでこの方法により、光劣化の少ない高品質な太陽電池用材



料が作製できることを示しました。この方法を微結晶シリコンの作製にも適用した結果、結晶性をうまく制御できることが確かめられ、さらに太陽電池に必要な電気特性の実現を目指して研究を進めています。

一方、現在広く利用されている単結晶シリコン太陽電池においては、エネルギー変換効率を高めるため、シリコン表面の電子状態を改善する方法

として、パッシベーションと呼ばれる技術が研究されています。当研究室ではこのパッシベーションに関連して、水素ラジカル照射を導入することによって良好な効果が得られることを示しました。さらにこれを発展させてシリコン窒化(SiN)膜をシリコン表面に積層することによってパッシベーション効果を高める方法を研究しています。

東京農工大学 TLO について

亀山 秀雄 (化工 S48)

▼東京農工大ティー・エル・オーについて

平成13年9月29日(土)午後3時30分から設立総会が工学部11号5階多目的会議室にて開催されました。引受株式総数1600株、出席した株式引受人(委任状も含む)378名、この引受株式総数1294株。発起人代表の梶井功元学長が、本会は適法に成立した旨を宣して、議長選任を諮り、満場一致で株式引受人 梶井功氏が議長に選任されました。提出された第1号から6号までの議案がすべて可決され、午後4時25分に散会しました。議案の詳細は、下記のTLOのホームページをご覧ください。
<http://www.tuat-tlo.com>

引き続き取締役会が4時35分から開かれ代表取締役が選出されました。TLOの役員は下記の方です。

会長 梶井 功

代表取締役社長 伊藤 伸

取締役 前田裕子, 川口竜二, 益子 堯

監査役 浅井美博

社長の伊藤氏は、新進気鋭の33歳、元日本経済新聞社の記者としてTLOやベンチャー関連の取材をされ、自ら起業家になるために筑波大学に社会人入学して経営学を学んだ方です。社長は常勤ですが、他の取締役、監査役は非常勤で、すべて本学の出身者です。新しく社長になられた、伊藤伸氏からこの紙面を借りて同窓会の皆様に設立に

あたり、絶大なるご支援を頂いたことを感謝し、社長として誠心誠意業務に励みたいとのメッセージを頂きました。

10月25日に文部科学省、経済産業省との最終的な打合せを行い、11月中には国からTLOとして承認される見通しです。承認後、本学の教官5名が副会長(西脇信彦)、取締役(渋沢栄、亀山秀雄、堤正臣、中川正樹)に非常勤として就任する予定です。

TLOの優先課題として、

- 1) 会員募集：現在14社が申込み済み。目標20社。
- 2) マーケティング活動：農工大教官の単独特許40件強、企業との共同出願250件程度を対象に共同研究開発センターによる特許評価をもとに取締役を核にしてマーケティング活動を推進する。現在2件の契約が進行中で年内に締結する見込みである。来年度からは、JSTを出願人とした農工大教官の約50件の特許のマーケティング受託が正式にできる見込みであり、品揃えを拡大する計画です。
- 3) 高度技術研修：専門企業と協力して実施。

TLOの中心的な業務ではありませんが、公的研究資金に管理会社としての大学の研究活動を支援することができるようになりましたので、この秋の補正予算に向けて、教官の研究申請に拍車がかかるものと思われま

部 会 ・ 支 部 だ よ り

◎応用分子化学部会総会◎

平成13年6月2日(土)に応用分子化学部会(名称、応用化学会)の総会を工学部総合会館で開催しました。元教官4名に加え、卒業生など約80名の関係者が参加しました。本年3月に御逝去された飯野善治名誉教授の御遺影が見守るなかで、総会冒頭に本部会元会長の大高直輝氏(昭和22年、繊維化学科卒)による飯野先生追悼の辞、全員による黙祷を行いました。

総会后同所にて懇親会を行い、出席者一同楽しい一時を過ごしました。



平野正雄(工化S48)記

◎神奈川県支部総会◎

平成13年7月14日(土)、神奈川県支部総会を本部より高橋幸資教授(応用生物科学科食品化学研究室)をお迎えして、横浜市鶴見のキリン横浜ピアビレッジで36名の出席で開催しました。

ビールの歴史や製造等工程を見学し、出来たてのビールの試飲をした後、総会に移りました。

総会は、小林支部長(蚕S30)の議長の下、猛暑で喉が乾いていたこともあり(?), 議案は満場一致で承認され直ちに懇親会に入りました。

豊田久承先輩(拓殖S17)の乾杯で宴に入り、飲み放題のビールも用意された大きなタンクが空になり幹事一同うれしい限りでした。また河村隆先



輩(獣S29)の寮歌も出、にぎやかな内に閉会となりました。

高橋先生には、猛暑の中おいでくださり、また学校の最近の状況などをお話いただき本当にありがとうございました。

熊谷豊夫(獣医S41)記

◎宮崎県支部総会◎

今年の宮崎県支部総会は、梅雨明けの初夏の太陽が眩しい7月20日に宮崎市平和台公園内の「森のレストラン」で、ほぼ貸し切り状態で行われました。

当日は夏休みに入ったばかりで、海の日(三連休)と重なって出席者が少ないのではと心配されましたが、例年並(?)の総勢22名で和やかに開催されました。

まず、野上会長(林S39年卒)の挨拶と第38回本部通常総会出席報告が行われた後、前年度の事業報告並びに今年度の事業計画が全会一致で決定されました。

懇親会に移り、久しぶりに顔を合わせた会員の近況報告や新規会員の自己紹介等で、時がたつのも忘れて昔話に花が咲きました。

その後、幹事が用意した農工大学歌集を手に、みんなで学生時代に戻った気分で賑やかに、校歌、駒場小唄、ペロリ節、渡良瀬逍遥歌などを斉唱し(どなり)過ぎて、用意された御馳走を残すほどでした。

最後に、平和の塔前で記念撮影し、来年も元気に再会できる事を祈念して散会しました。



森 房光(林S53)記

◎島根県支部総会◎

平成13年度の支部総会は、8月24日(金)に松江

市のホテル穴道湖で開催され、大学の近況と本部総会の報告があった。

その後、多田正哉氏(獣医S37卒)がインドネシア農業視察の報告を、パソコンを用い巧みに説明され、また同席の東の原農場の原康二氏(農S35卒、インドネシアに自宅ある程たびたび渡航)の解説も加わり、皆興味深く聞き入り深夜まで意見交換が行われた。

参加人数が8名と少なかったので、来年は誘い合わせて出席するように話し合い、再会を楽しみにして散会した。



中尾清治(農工S34)記

◎三重県支部総会◎

平成13年度三重県支部の総会が9月9日に津市内で開催されました。

本部からはお忙しい中、工学部教授の澤田孚夫先生にお越しいただき、大学の最近の様子についてお話しいただきました。

出席者は11名とやや少ない総会となりましたが、小倉さん(工化S43)、青山さん(化工H2)のお二人に初参加していただき、場を盛り上げていただきました。

戦中派の先輩からは、首相の靖国神社参拝問題、日本経済の現状について厳しいご意見も飛び出しましたが、いつもどおりの和やかな昼食会となりました。

支部長には、吉田 譲氏(獣医S45)を再選し、幹事も全員再選となりました。



古野 優(獣医S60)記

◎新潟県支部総会◎

平成13年度新潟県支部総会は、6月9日(土)新潟市内のクオリスピルにおいて29名の参加をもって開催されました。今回は遠方者に配慮し、土曜日2時の開催としました。

布施支部長の挨拶の後、予算・決算、役員体制、また、毎年9月に本県へ農業実習に訪れる現役学生の激励会を新たに支部行事に盛り込むことが承認されました。

懇親会は世代を越え母校での思い出や旧友のことなどに花を咲かせ、大いに盛り上がりました。総会もあつという間に終わりの時間となり、みんなまだ名残惜しそうに、来年の再会を誓いながら散会しました。



村山康則(農H3)記

◎福島県支部総会◎

福島県支部(支部長小松恭雄・林S29)第36回総会は、天候に恵まれた6月23日15時より福島市内「セレモニーホールフロンティア」にて、会員41名出席のもと本部から理事の加藤誠教授を迎えて、盛大に開催されました。

総会は、小松支部長あいさつの後、議事に入り平成12年度の活動及び会計報告並びに平成13年度事業計画等が満場一致で承認されました。来賓の加藤教授には、総会への祝辞と併せて大学の近況を持参された資料をもとに紹介していただきました。

総会の後は、恒例の懇親会に移り、先輩諸氏の昔話や自身の近況報告などに花が咲き、つつい



時間の経つのも忘れて楽しいひと時を過ごし、次期総会での再会を誓って、盛会のうちにお開きとなりました。

吉田 清 (製糸 S56) 記

◎長野県支部信濃同窓会総会◎

平成13年9月22日、長野市において平成13年度東京農工大学信濃同窓会総会を開催しました。

信濃同窓会は、長野県内の本学同窓生約700名により組織されており、当日は、県内各地から、また、昭和13年卒から平成3年卒までの同窓生約60名が集まり、大変盛会なものでした。

総会では、竹下会長のあいさつに続いて議事に入り、収支決算、収支予算、平成13～14年度役員が承認されました。その後、本学同窓で県果樹

試験場の小池洋男場長による『りんご「ふじ」～りんご産地の救世主・日本から世界へ・そして遺伝子～」と題した記念講演が行われました。

また、続く懇親会では、学生時代の思い出やそれぞれの近況について世代を超えて語り合い、最後は全員で校歌を合唱し、大変楽しいひとときを過ごすことができました。



倉石和典 (蚕糸 S61) 記

ク ラ ス 会 だ よ り

◎昭和38年繊維工学科卒クラス会◎

— 繊維工学38会 —

我々、繊維工学38会はこれまでも数年毎にクラス会を開催してきたが、今回は全員の還暦を祝い、かつ多くのメンバーが会社勤めから(一応)開放されたこと、等の人生の大きな節目としての思いを込めて平成12年11月にクラス会を東京・目黒の雅叙園で開いた。

さらに、平成12年3月に退官された壁矢先生をお招きし、改めて先輩でもある先生のご功労をたたえと共に謝意を表した。

今回は関西方面からや初めての参加者もあり、21名の参加者であった。

皆さんの近況、メンバーそれぞれの人生を伺えるコメント、さらには昔に返って、若き日の悪戯・古傷の話し等、同期クラス会ならではの情報交流であり、まったく遠慮がなくストレスを感じさせないひとときを過ごすことができた。また、殆ど

が2次会にも参加し、愉快的長い時間を共に過ごすこともできた。

我々、昭和38年卒は繊維学部が工学部が変わった第1回の卒業生である。

繊維工学科はその後幾多の学科の編成替えがあり、現在は有機材料化学科となっている。在学当時には我々は繊維工学科のカリキュラム問題に(生意気にも)口出ししたり、議論をしたことを覚えているが、今後とも繊維の科学技術を含めた特色ある講座が農工大で発展することを祈念したい。

なお、前回のクラス会ではそれこそ多くのメンバーが30数年ぶりに工学部を訪れ、その変貌に驚くことしきりであった。

今回は関西のメンバーが多く参加できるように、関西方面で開催することとした。

深水智明 記

◎紫明会(昭和29年獣医学科卒業)◎

平成12年10月30日～31日に46回目のクラス会を栃木県の塩原温泉「ホテルニュー塩原」に於いて当番幹事森田氏のお世話で開催した。

今回の出席者は近くで開業の27年卒穴水氏の参加を得て合計11名である。健康上や都合が悪くて欠席する者の返信ハガキの中の板橋氏は、当日、ネパールで登山中とまだまだ元気である。



宴会は穴水先輩持参の獣医学科と駒場寮の卒業記念写真のコピーを見ながら、学生時代に帰って話が弾んだ。各自の近況報告は久しぶりの顔を見ると思わず話が長くなってしまった。飲み放題の酒類も若い頃と違い上品な飲み方になり、大声と笑いに終始する宴席であった。宴会後は一室に集まりビールを飲み、次々に出される四方山話に時の経つのを忘れてしまった。

翌日は秋晴れに恵まれ、近所の森田氏の旧職場である地方競馬教養センターの施設を見学する。道の駅「湯の香しおぼら」で休憩後、昼食はジギスカン鍋を満喫する。次回は、岡崎・上家両氏の当番により茨城県での再会を約し散会した。



山崎英世 記

◎昭和33年林学科卒クラス会◎

2月11日に開かれた東京集会に併せて参集したクラスメートは11名。遠くはインドネシアから松崎君が、かけつけてくれた。

同期の最若者も全て高齢者と言われる65歳を迎えたが、皆まだまだ元気。半数が仕事を持っている現役が居り、引退者も趣味やパソコンに打込んでいる。

帝国ホテルの一次会終了後銀座・京橋と、遠く沖縄の島田君らを酒の肴に話が続き、再会を約してお開きになったのは20時であった。

(E-mailのアドレスを持っている人は、小島君 t-kojima@air.linkclub.or.jp に連絡の事。MLに登録の上、全員と交信出来るようになる)



山田泰夫 記

◎10年目を迎えた NTM 会◎

NTM 会を直訳すれば、「農工繊維団員の会」となり、学科や卒業年度を問わず、東海地区(東部は綿織物、西部は毛織物)の地場産業で活躍した、又は活躍している同窓生が集まる親睦会である。時には遠来の同窓生も参加して賑やかな親睦会となるが、その場所はいつも愛知県一宮市の「桂寿司」と決まっており、日時が決まれば自然と足が向く。

このユニークな同窓会は、年2回の会合を重ねてきたが、今年設立10周年を迎えることとなり、それを記念して去る4月、一同、岐阜県の下呂温泉に集合、激動の10年を回顧しつつ、いつものように気炎を上げた。

地場産業はこのところ沈滞気味であるが、NTM 会のメンバーは(老いて)ますます元気である。記念写真の面々は、

前列左から、小林袈裟男(紡織S26)三輪定彦(紡織S25)伊藤直哉(織化S24)桜井雅志(織工S32)、後列左から、香村 馨(紡織S26)小林計夫(織工S35)宇野加津美(織工S39)佐藤裕介(織工S30)。



桜井 記 写真：香村

◎農学科36年卒クラス会◎

昨年10月5日に11名(農学科7名、農業工学専修4名)が出席しクラス会を府中の農場で開いた。20数年ぶりの再開であったが、それぞれの分野でまだまだ元気で活躍している面々であった。農場では園芸教室の箱田先生が牛舎や柿園、ブルーベリーの育成・保存園(日本の発祥の地)等を案内してくれた。みんな当時を懐かしく思い出していた。

また、最近の大学については学科、講座の再編成、大学院連合の設置など現在の時勢を背景とし、より充実を図っていることの説明があった。一方、キャンパスには女子学生が多く見られ(全学生の約半数)華やいだ光景が感じられる等、当時の男子仙人郷とは趣を異にしていた。

大國魂神社の宴会場では大学や駒場寮での生活、また卒業後の40年間の活躍等を語り合い、2

～3年後の再開を楽しみにして散会した。



森園幸二郎 記

◎農芸化学科34年卒台北で開いたクラス会◎

4月11日桜吹雪のなか吾らがクラス総勢8名は羽田を後に台北へ旅立った。ここ数年自由な時間をもつようになった朋友も増えて海外でクラス会を開きたいねという声が大きくなり、今回クラスの半数近くが参加して海外で開くはじめてのクラス会が実現した。

珠玉の宝物を納めた故宫博物院(写真)の見学、中国料理に舌つづみ、さらに街中を散策するなど楽しさもさまざまだが、圧巻はやはり三連泊した台北のホテル「国賓飯店」の一室に全員が集まり夜半まで続いた連夜のクラス会であった。樺並木の校門をくぐって46年、半世紀におよぶ旧交からはじまりとぎれることない話題に、果ては往年の恋心を吐露するなど和やかなうちに三夜に及んだ台北でのクラス会は大盛会のうちに幕を閉じ、14日無事羽田に帰った。

“台湾の兵士でありし老ガイド昭和7年生まれと名のる”

(同行の北田隆が詠む)



田中治夫 記

◎蚕糸生物学科50年卒クラス会◎

蚕糸生物学科第一期卒業生(昭和50年卒業)は、平成13年2月24日京都市堀川で同級会を開催した。平成元年に東京都内で開催して以来12年ぶり、2回目の開催。当日は北は新潟県、南は大分県か

ら10名が参集し、再会を懐かしみ夜遅くまで美酒談義に花が咲いた。集まった同級生の職業は、自営業者、公務員、教職員など様々。10名のうち8名までが蚕糸関係の仕事から転職しているのが現実。卒業以来26年間、養蚕農家の指導と研究一筋に頑張っているのが“東京都職員”ただ一人であることが何とも皮肉であり、我が国の蚕糸業の厳しい現状を物語っているように思えた。翌日は、南禅寺の山門の楼上から京都市内を眺め『絶景かな絶景かな……』。名物の「湯どうふ」を賞味した後散会した。次回の同級会は、10年後を目途に九州・湯布院温泉に夫婦同伴で集まることを申し合わせた。多くの仲間が集まることを期待したい。



松久房義 記

◎西ヶ原寮同じ釜の飯の出会い45周年同期会◎

ユニークな名称の同期会を、5月12日、13日長野県飯田市のシルクホテルに一泊して開催した。西ヶ原寮は旧繊維学部の学生寮で、小金井キャンパス内に和、衷、信、義の呼称をもつ4棟から構成されていた。昭和37年に取壊しになり、今ではその存在さえ知る人は少なくなった。

しかし我々寮生活をした者にとっては数々の青春のページを刻んだ忘れ難き寮である。昭和31年入寮でここに寝起きを共にし同じ釜の飯を食った繊維4学科の同期生および同じ敷地内にあった楓寮(女子寮)にも呼びかけて45年目にしての初会合であった。卒業以来一度も顔を合わせた事もない面々が、福島、兵庫、奈良など各地から27名(女性2名)と多く集まった。ホテル経営者の先輩で元寮長の中田滋雄氏(製糸28年卒)にも出席をいただ



き、各自寮の思い出、卒業以来の歩みそして現在の状況を報告しあった。なんと言っても共通の話題である寮生活の懐かしい話しが中心で、宴会はいやがうえにも盛り上がった。天候にも恵まれ駒ヶ岳ロープウエーからの南アルプスの景観や天竜舟下りを楽しみながら、またの再会を約しての別れとなった。

矢野義治（養蚕 S35）記

◎「かいこ会」同級会◎

戦時中の昭和19年9月卒業した養蚕学科、栽桑学科、製糸学科3科合同で「かいこ会」同級会を作っている。「かいこ会」とは、蚕を連想する人もあれば、過去を回想する人もある。

平成13年5月22日、23日、浅利、藤井、堀池の幹事で、伊東市伊豆高原において、「かいこ会」を開催した。参会者は、18名、夫人4名、計22名であり、昨年よりも出席者数が8名も多く、老いを吹き飛ばす元気さを感じさせた。

出席者は、楽しく旧交を温め、互いの健康を祝した。翌日は、熱海のMOA美術館を見学した。

明年は、神奈川県、東京都居住者の幹事で開催することとした。多数の会員が出席されることを願っている。



藤井 實 記

◎昭和23年蚕業実科卒クラス会◎

猛暑続きの7月17、18日に、長野県駒ヶ根市においてクラス会を開催した。

前回までは隔年に開催してきたが、昨年の同級会で、毎年開催の声が多かったため、今年も開催することとした。

開催地は以前から出席の意思があり、参加出来なかった病弱者の出席を得るため地元の下平兄に設営をお願いして駒ヶ根市の西山荘に決定した。

当日、3時には12名が懐かしい顔を見せ、遠く九州から2名が馳せ参じてくれた。また、九州文学界で活躍中の畑島兄は、参加者にお土産として

「有田焼」の湯飲み茶碗を持参してきた。

小川兄も娘さんに付き添われて到着し、歓談。

6時から記念写真撮影後、懇親会にはいり、よく呑み、よく語り、お開き後も話は尽きない。

翌日は8時駒ヶ岳に向け出発、ロープウエーで2,612mの千畳敷カールまで登り、雄大な景色と高山植物群落の花を愛でながら周辺を散策し、下山。再会を約して解散。



吉野治男 記

◎昭和28年製糸科卒クラス会—製糸28会—◎

昭和28年に卒業以来、約半世紀になる。最近では2年毎を目標にクラス会を開催している。今回は6月21日南熱海松風苑で開催した。古希を越えると体調を崩している人が多く、28名の卒業であったが、7名が既に鬼籍に入り、9名が参集された。数の上ではいささか寂しかったが、集まった方々は健康そのもので、飲む量も、歌う声のほりも若い者に負けない頼もしい限りであった。話題は当時の母校や先生、先輩後輩の話になり、卒業以来一度も母校を訪ねたことが無い人もいた。最近の母校の発展状況を聞くにおよび、驚きとうれしさとなり、次回のクラス会は母校を訪ねようではないかということになった。翌日、亡き友に黙祷をささげ、健康での再会を約して解散した。まだ卒業以来一度も出席されていない友には、元気な姿を次回は是非見せて頂きたい。

写真をみただけでは名前と顔が一致しないと思うので出席者を記しておく。

石井孝行・勝野盛夫・亀井清吉・河原雄輔・直井幸夫・中田滋雄・畑野富重・峰奥志郎・矢島恒男



勝野盛夫 記

◎糸交会(糸S31)クラス会◎

今年度は、信州の、岡谷・下諏訪地区が指定され、地域の歴史や文化、新旧産業などを見聞しながらの開催となった(9月28、29日)。参加者は15名。幹事役は、岡谷(瀬木)、下諏訪(篠遠)。これらの地域は、何れも日本の輸出主要産業、製糸業の創業者群を輩出した地域である。

「片倉」の創業者、兼太郎翁もその一人であった。生家(岡谷)を訪ねたが、生い立ちや経営方針(質実に徹し、従業員に教育・福祉、生産に新技術・生産性向上、業容拡大)の「新しさ」を改めて知る機会を得た。また、下諏訪地域でも、同様に明治初年に営業製糸が興り、地域への貢献を果たしていた。この地は、諏訪神社の勇壮な御柱祭りや木落しでも有名な地である。下社を訪ねたが、7年毎の祭りや地域の人々の生活リズムなど、境内四隅に建てられた御柱からも伝えられるようであった。

諏訪湖の北に広がる一連の美しい高原地帯を巡ったが、近づく台風のために本来の景観は観られなかった。コースの終りでは、五味兄の案内で、縄文の遺跡で知られた尖石(茅野)を訪ねることもできた。途方もなく遠い神秘の世界を観た。

クラス会は初日の夕、諏訪神社脇の山王ホテルで開催。会務報告、同窓会、大学の近況など、時の話題がとりあげられた。そして、来年の開催地は福島地区とされた(幹事役は畑中、松野両兄)。

クラス会は初めての地域だ。再会を約して散会した。帰京直後に大型の台風15号は関東を襲った。



瀬木秀保 記

◎昭和29年蚕糸別科養蚕専攻卒クラス会◎

平成13年10月22日奥日光「幸の湖荘」を会場として第9会クラス会を開催しました。

はじめに、北園幹事長のあいさつにつづいて、本会の運営安定を図るため会長を選任したい旨の提案があり、協議の結果群馬県の川端義隆氏をお願いすることになった。

遠路、山形より石井和夫、斎藤京二両氏、長野

からは、藤森生男氏が夫婦同伴で出席され総勢14名の参加となりました。

小金井の学園生活から近況に至る話に花が咲き、また懇親会の方も最高に盛り上がった。

翌日は天候に恵まれ、車に分乗し北園幹事長の案内で大自然の紅葉を楽しみながら光徳牧場・大笹牧場を見学し、次回2年後茨城県で再会することを約束し小山駅で解散した。



松本四郎 記

◎昭和17年(9月)拓殖学科卒クラス会◎

第10回拓二回を平成13年10月18～19日横浜メルパルク(郵貯会館)で2年半ぶりに開催した。級友40名中現存22名、出席は8名であった。年齢も皆80歳前後になった。他に農工大の会議に出席中の同窓会長西尾邑次氏(農科同期)がかけつけて来られ宿泊を共にした。出席者の中には大病後のリハビリ中の3名も、涙ぐましい程であった。18日は雨模様の中、大棧橋からロイヤルウイング号(3,000 t 級)に乗船して中華バイキングを楽しみながら夜の横浜港をクルージングした。その後ホテルで西尾氏を囲んで昔の高農を偲び今の農工大の現状を聞く。19日は市内観光バスでランドマークタワー(70階)、ベイブリッジ、港の見える丘等を廻り、中華街で昼食後散会。これからも何とかこの友情を続けようと、早速次回は来年鎌倉を決定した。



池田他人 記

◎製糸部会女子部総会◎

今年の女子部総会は10月4日より6日にかけて、岡谷市の観光と石和で開催された。

開催当日は、昨年同様素晴らしい天候に恵まれ、昭和13年ご卒業の大先輩から、昭和25年卒の方まで総勢20名のご参加を頂いて開催された。

総会では、女子部文化事業部で本年ようやく発刊された「真綿づくり、糸づくり」の本の報告を始め、今後の女子部活動について活発な意見交換が行われ、まことに有意義であった。

観光は、先ず諏訪大社での正式参拝の後、勇壮な御柱祭のビデオを拝見したが、日本の祭のみなげるエネルギーに改めて大きな感動を覚えた。

その後、岡谷に今も残る「ざぐり工場」での製糸を見学したが、皆様はご自分が勤務した頃の事を思い出し感慨もひとしおといった様子であった。

次いで岡谷の農業生物資源研究所で、最先端の蚕糸技術について丁寧な説明を受けた後、実際の生産現場も見学したが、ざぐり時代から現代迄、約100年の時の流れを実感して、先輩の方々は感無量といったおもちであった。

次の総会は東京に決ったが「有楽町で又、逢いましょう!!」と再会を約して帰路についた。



今年も思い出に深く残るいい総会であった。

小此木エツ子 (S24年卒) 記

◎樺寮建寮三十五周年記念祭◎

拝啓 清秋の候、貴台にはますますご清勝のこととお喜び申し上げます。

さて、本年は本寮も建寮三十五周年を迎えます。樺寮OBの皆様には各分野でご活躍の由承っております。このことは、私たちの大きな誇りであります。

今回、下記要領にて樺寮建寮三十五周年記念祝賀会を開催したいと存じます。諸般ご多忙中とは存じますが、万障お繰り合わせの上、ご出席いただけますようご案内申し上げます。

敬具

東京農工大学樺寮

建寮三十五周年記念祭実行委員会

1, 日時 平成13年12月15日(土)

1, 場所 東京農工大学工学部 生協第2ホール
情報はホームページにも掲載しております。

<http://keyakiryu.tripod.co.jp>

keyakiryu@yahoo.co.jp



製糸学科から高分子工学科へ、 その生命工学科における絹の研究

名誉教授 北村愛夫

大正3年4月東京高等蚕糸学校が創設されて以来製糸学科の名称(当時は製糸科,その後大正12年10月の規則改正で製糸学科には母校が昭和24年4月新制大学に昇格してからも継承され,昭和57年4月工学部における繊維系学科の改組により高分子工学科と名称変更になるまで約70年の長きに亘って継承された。

高分子工学科はその後の博士課程設置に伴い、平成元年(1989年)物質生物工学科の応用生物学講座としてその主体が引継がれた。さらに平成7年(1995年)には近年の生命工学の高度化、専門化の時代的要請に応える最もふさわしい内容をもつ講座として応用生物学講座を核として生体機能工学講座、応用生物学講座の2大講座を擁する

生命工学科が誕生したのである。この間特に大学になり昭和38年以来学科名は別として、社会のニーズに応えるため講座内容、カリキュラムの数次に亘る整備、改正を重ねてきた。しかし乍ら製糸学科の教育研究の目標は当初より絹生産に関連する科学、技術の推進が中心であったことに変わりなく、この姿勢は母校が新制大学に昇格してからも継承され、多くの有能な製糸技術者を輩出し、わが邦蚕糸業の発展に大いなる貢献をなしたことは周知のことである。製糸の科学・技術の進展に寄与する教育・研究とは別に、絹の構造解析にかかわる本格的な教育・研究(例えば絹フィブロインの分子形態、結晶形態、セリシンの構造等々)は昭和50年4月信州大学繊維学部より着任された平林 潔教授によって展開された。それに続く奥山健二、朝倉哲郎の両教授によって精力的に進められた。その研究手法はX線回析、赤外吸収スペクトル分析、旋光分散測定(旋光度、円偏光二色性-CD)熱分析(示差走差熱量分析-DSC)などであるが、ここでは朝倉教授による核磁気共鳴(NMR)法による絹の研究の現状を紹介する。朝倉教授は昭和56年2月に製糸学科に着任され、以来一貫してNMR法を駆使し、オレフィン系高分子のNMRスペクトルの帰属と構造研究、生体高分子の精密構造決定、高分子固体の精密構造決定等々の研究を展開し、特に絹については新しい絹様繊維の創製を試みるなど、これらの研究により平成12年度高分子学会

賞を受賞され、現在生命工学科の生体機能工学講座で生物物理学を担当され今日に至っている。核磁気共鳴法は原子間の位置の決定や、運動状態を明確にしうる精密構造解析に威力を発揮する分光法で、これによって朝倉教授は高分子固体である絹の結晶構造、非晶構造を原子座標レベルで精密構造決定することに成功された。家蚕の吐糸前(繊維化前)のフィブロイン構造(silk I型)はより精度の高い構造を得ようと配向させると、silk II型(繊維化後)に構造変化し、従来法では構造解析が困難であった。配向させずに構造決定できる新しい固体NMR法を開発し、それによって、silk I型は全く新しい“繰返し β -ターン構造”と名付けられる構造であると結論した。

さらに野蚕(エリ蚕、サク蚕、テン蚕)についてもNMR法により得られた知見をもととして、遺伝子組替えの手法を駆使し、家蚕、エリ蚕のハイブリットシルクの創製(分子設計-Molecular design)、例えば結晶部分は家蚕の構造を持ち、非結晶部分はエリ蚕の構造を持つという全く新しい物性を備える絹様繊維の創製が試みられようとしている。

絹生産の科学・技術の教育・研究を使命とした伝統ある製糸学科が生命工学科へと発展し、新しい絹様繊維の創製という高度な学術レベルでの絹の研究展開がおこなわれようとしている。誠に心強く、今後の研究展開が待たれるところである。

同窓会、後援会のホームページ

同窓会、後援会の各ホームページを開設してから6ヵ月を経過しようとしております。逐次内容的にも充実させ、関係情報はできるだけ多く、会員の皆様のご理解やご協力を得やすくするよう努めております。

同窓会関係の事業計画内容及び予算、決算については、毎年、7月1日号の会報に、通常総会の報告書として、当該年度決算書、次年度予算書を掲載し、それらの詳細について報告しております。同窓会関係ホームページの「農工通信」欄で検索可能です。

また、(財)東京農工大学後援会関係の年度事業内容及び予算、決算については、(財)後援会関係の事業報告書、決算書等、計算書類、監査書などが後援会ホームページに掲載される予定となっております。

美術サロン



「魚沼の初夏」
石川雄二(糸S30)

東京農工大学創立50周年記念事業募金会報告とお礼

記念事業募金会会長 久保田 富一郎

東京農工大学創立50周年記念事業募金会は平成12年11月30日をもちまして2年間の募金活動を無事に終了することができました。このたびは大学の教育研究活動の向上を目的としてご寄付を仰ぎましたところ、その趣旨にご賛同頂き、同窓生を中心に教職員や名誉教授など多数の方からご寄付を賜り、誠に有り難く感謝にたえません。

ここに略儀ながら、ご援助頂きました諸兄姉のご厚志に対して厚くお礼申し上げますとともに、今後とも変わらぬご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

なお、本募金会理事会は最終的な収支決算と事業内容の実施につき慎重に審議し、平成13年3月24日の拡大役員会において東野文男理事長が下記のような報告を行い、了承をえました。さらに、平成13年4月24日に開催されました東京農工大学の部局長評議会においても同氏が同じ内容の記念事業募金会最終報告を行い了承されておりますことをここに報告申し上げます。

記

記念事業計画

- 1) 「東京農工大学50年史」の出版
- 2) 「本学国際交流」の援助
- 3) 「50周年記念会館建設」の援助

収支決算

1. 収入金額(募金額)	合計46,479,057円(総計2,449件)
2. 支出	
東京農工大学50年史の出版および50周年記念事業募金会趣意書の印刷と発送に要した費用	2,799,349円
創立50周年記念会館建設費(平成13年7月19日、大学に寄付)	40,000,000円
同会館設計費(平成13年7月19日、大学に寄付)	2,100,000円
国際交流援助資金(平成13年7月19日、大学に寄付)	800,000円
募金礼状、報告書	600,000円
予備費	179,708円
合計	46,479,057円

東京農工大学創立50周年記念事業募金会を終えて

募金会理事長 東野 文男

東京農工大学創立50周年記念事業募金会は多くの同窓生のご支援を得て平成12年11月30日に2年間の募金活動を無事終了することができました。

本学同窓生のうち約2,400名の方々が募金の趣旨に賛同下さり総額約4,000万円を会館の建設費に充てることができました。ここに略儀ながら、ご支援頂きました諸兄姉のご厚志に対して厚く御礼申し上げますと共に、今後とも変わらぬご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

本来ならば、本報告は募金活動終了後、もっと早い時期に行うべきでありましたが、本募金会には専任の事務職員がいないために、多くの時間を要したことをご理解頂きたいと思っております。なお、大学本部庶務課の方々には多大なご協力を頂き、誠に有難く感謝にたえません。その結果、4,000万

円の他に予備費の殆どを50周年記念会館の建設費に充てられるようになりました。募金下さった方々には本年9月下旬に久保田富一郎会長名で「東京農工大学創立50周年記念事業募金会報告とお礼」と「名簿」をお送りいたしました。これらの送付先は送金為替票に記載されている住所・氏名を基に作成しましたが、判読が難しい時には、不正確な住所・氏名のままお送りしてしまった場合があると思います。また、同窓生と名誉教授等の分類についても誤りがあったかも知れません。これらの不手際については、失礼をお詫びし、何卒ご容赦頂きたくお願い申し上げます。

1日も早く記念会館が完成することを念じております。

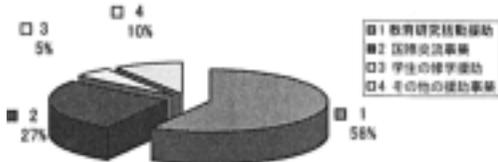
東京農工大後援会の活動

▼平成13年度(平成13年4月～14年3月)収支予算規模については、経済環境悪化の影響を受けて、例年に比較して低水準となっております。

今年度は大学に対する教育援助額も7千5百万円となり、既報のとおり平成9年当時の水準とせざるを得ない状況となっております。

(助後援会発足(昭和54年)以来、平成13年までの援助事業額の累計は約2億5千万円に達しており、大学の教育研究の側面的支援を実施してまいりました。

また、平成6年～13年度(予定)の教育援助累計額は約9千万円となりますが、その教育研究事業内容について見ますと次の図のようになっております。



平成6年～13年度(予定)教育研究援助額累計百分率

このように、援助の9割近くが研究活動、国際交流の推進などにあてられ、その恩恵は、特に活

々な研究活動、教育研究環境の充実、大学改革の維持等様々な形で、在学生および卒業生に寄与しております。

今日、東京農工大学は、農学部5学科、工学部8学科、大学院4研究科、農学および工学を融合し設置された生物応用科学研究科をはじめ広範な研究領域、施設を擁し、多くの研究成果の社会的還元など高い評価を得ております。

▼こうした大学の教育研究活動に対する当後援会の援助活動は、財団の基金によって運営されております。この基金の源泉は卒業生、大学関係者、入学生、在学生等の父母等による賛助会費と基金からの利息収入が主なものです。しかし、金融情勢は悪化の状態が続いておりますので、基金の充実をはかるために皆様方からのご協賛を是非お願いいたしたく存じます。

▼(助)東京農工大学後援会へのお問い合わせやご連絡は、事務局 TEL042-364-3328 FAX042-335-3500へお願いいたします。また、後援会の組織や活動内容などについてはホームページ(同窓会と共通アドレス)<http://www.tuat.ac.jp/~dousou/>後援会欄をご覧くださいと存じます。

美術サロン



「塔のある風景」

工学部物理システム工学科 佐藤勝昭教授

▼ 平成13年10月1日現在同窓会会員数

区 分	現在会員数
農学・生物生産学部会	2,873名
蚕糸生物学部会	2,210
植物防疫学部会	1,100
農芸化学・応用生命化学部会	1,846
林産・生物資源工学部会	1,254
環境科学部会	1,218
林学部会	1,899
生産環境工学部会	1,238
地域生態システム学科	255
獣医学部会	1,958
(農学関係部会)	15,851名
製糸・高分子・生命工学部会	2,579名
機能材料工学部会	1,875
化学工学部会	1,506
応用分子化学部会	2,796
機械システム工学部会	3,774
電気工学部会	1,794
電子工学部会	1,375
応用物理学部会	1,355
情報工学部会	1,066
(工学関係部会)	18,120名
(正会員合計)	33,971名
特 別 会 員	* 301名
準 会 員	5,943
賛 助 会 員	2,302
名 誉 顧 問	4
顧 問	8
(会 員 合 計)	42,529名

註 大学院連合農学研究科、大学院博士後期課程、大学院生物システム応用科学研究科修了者は、含まれておりません。

同窓会支部長及び支部連絡先(職域を含む)

(平成13年11月1日現在)

道府県	支部長名	連絡員名	連絡先	電話
北海道	柳澤 秀夫 (農工28)	宇野沢正美 (農工46)	自宅	011-898-3198
青森	三橋修三郎 (獣医16)	野村 昌志 (農工39)	自宅	0177-38-3048
秋田	佐藤 巖 (獣畜24)	野村 俊悦 (農 44)	県雄勝総合農林事務所	0183-73-5180
岩手	堀田 成雄 (林 31)	深澤 光 (林 56)	県林業技術センター	019-697-1536
山形		今田 邦信 (蚕糸57)	県農業技術課	0236-30-3031
宮城	早坂 和夫 (農工39)	鈴木 正彦 (林 57)	県都市計画課	022-211-3134
福島	小松 恭雄 (林 29)	吉田 清 (製糸56)	県農業経済課	024-521-7349
茨城	永瀬 純一 (栽桑18)	川野 和彦 (林 50)	県農林水産部林政課	029-301-4016
栃木	渡辺 寿一 (獣医25)	南木 好樹 (農工58)	県農政課	028-623-2284
群馬	大河原清一 (養蚕24)	山崎 英二 (環保63)	県林務部林政課	027-226-3223
埼玉	池田 勝彦 (獣医31)	八須 徳明 (農 54)	県農芸畜産課	048-830-4189
千葉	庄司 健男 (製糸28)	内田 律夫 (養蚕47)	県農芸畜産課	043-223-2887
東京	細溪 美古 (林 25)	細溪 美古 (林 25)	サイビ国際総合学院	03-3829-3766
神奈川	小林 行塚 (織別30)	熊谷 豊夫 (獣医41)	自宅	042-782-7873
新潟	布施 康正 (獣畜20)	村山 康則 (農H 3)	県新潟農政事務所	025-231-8187
富山	加茂 正三 (拓殖19)	石黒 哲也 (植防56)	県農林水産部普及技術課	076-444-3278
石川		北川 康一 (農工46)	県農林水産部農地整備課	076-223-9232
福井	島田 昭男 (林 38)	野坂 雄二 (農工53)	県坂井農林総合事務所	0776-66-3360
山梨	鶴田 栄一 (織維19)	赤池 栄夫 (蚕糸49)	県地域政策課	0552-37-1111
長野	竹下 悦男 (農 34)	倉石 和典 (蚕糸61)	農政部農業技術課	026-235-7221
岐阜	麻生 迪夫 (林 38)	藤掛 雅洋 (林 62)	県健康福祉環境部環境政策課	0582-72-1111
静岡	戸塚 宏 (農 16)	丸山 淳 (林H 2)	県北遠農林事務所	0539-26-2314
愛知	春日井達造 (獣医16)	瀧川 桂三 (林 41)	県豊田土木事務所	0565-35-1311
三重	吉田 譲 (獣医45)	古野 優 (獣医60)	県南勢家畜保健衛生所	0598-28-2266
大阪	奥野道太郎 (林 16)	竹中 秀夫 (製糸50)	グンセ(株)人事開発部	06-6348-1322
京都		西村 寿 (農工50)	京都府土地改良事業団体連合会	075-451-4137
滋賀	地平 寛治 (農 32)	森井 源蔵 (農工50)	県農政水産部耕地課	075-528-3955
奈良	武田 博之 (織化38)	武田 博之 (織化38)	自宅	0745-72-7635
和歌山	石谷 敏夫 (農実9)	中尾 俊二 (林 53)	自宅	0738-52-0586
兵庫	松岡 克巳 (獣医18)	三宅 昭仁 (林産55)	県農林水産部治山課	078-362-3469
岡山	永井 仁 (獣畜19)	関 哲生 (獣医H 7)	県農林水産部畜産課	086-226-7429
広島	貞森 昭宏 (工化39)	三宅 信行 (環保55)	自宅	082-822-4543
山口	赤木 道博 (獣医49)	岡本 賢一 (植防H 4)	県立農業大学校	0835-38-0510
鳥取	西尾 邑次 (農17.9)	小林 寿 (製糸24)	自宅	0859-29-2644
島根	萬燈 末達 (農 16)	中尾 清治 (農工34)	自宅	0854-27-0251
香川	鳥飼 孝二 (獣医32)	河野 幸彦 (林 63)	県西部林業事務所	0877-73-2347
徳島	岡田 幸助 (林 28)	井上 雅仁 (林 53)	県池田農林事務所	0883-72-1111
高知		寺峰 孜 (養蚕45)	高知学園短大講師	0888-40-1121
愛媛	重松 正矩 (製糸32)	池上 正彦 (蚕糸52)	県農産園芸課	089-941-2111
福岡	藤木 重喜 (拓殖18)	西田 晴二 (獣医41)	県農政部畜産課	092-643-3496
佐賀	貞松 光男 (農 34)	貞松 光男 (農 34)	自宅	0952-72-4368
長崎	本多 正二 (製糸32)	永尾 嘉孝 (農 42)	県農業技術課	095-823-1180
熊本	大石 清隆 (養蚕25)	猿渡 真司 (農工61)	県宇城地域振興局農地整備課	0964-32-2111
大分	漆間 友喜 (養蚕34)	守永 信幸 (植防61)	大分県職員組合	097-532-4919
宮崎	野上寛五郎 (林 39)	森 房光 (林 53)	県林務部山村対策室	0985-26-7157
鹿児島		遠矢 栄久 (林産50)	自宅	0992-67-6946
沖縄	仲里 哲次 (養蚕19)	川上 光男 (農 58)	県中部農業改良普及センター	098-973-5202
横浜会	三戸森領夫 (製糸31)	花田 正樹 (製糸49)	横浜生糸問屋協会	045-211-2726
千葉共済		計良 伸行 (獣医48)	県農業共済連家畜部	043-241-2171

掲 示 板

▼平成13年版会員名簿発行

この2年間に亘る準備期間を経て平成13年度版会員名簿が完成いたしました。

この間、各支部、各部会の皆さんや同窓会関係者には大変ご協力を頂きました。改めて厚くお礼申し上げます。

特に今回は大学の発展的学科再編・改組・改称などが重なり、会員の異動等も多く、名簿編集の環境としては非常に難しい条件下にありました。

不十分な点もあろうかと存じますがご理解のほどお願い申し上げます。

今回の名簿では、正会員・準会員・その他を含め、前回の平成9年度版に比較して約4千名を超える増加となり、4万5千名を取録することになりました。

「名簿」発送は従来への慣行に従い、次のような基準で会員各位にお送り申し上げます。

①終身会員、②10年分前納会員、③年会費(年額1,500円)として、平成10年度(例平成10年4月～11年3月)以降、少なくとも3ヵ年度分合計4,500円を納入頂いた会員

皆さんの周囲で「名簿」が未着の方がおられましたら、年会費をお納めの上、取得されますようお願いいたします。

▼大学創立50周年記念会館建設工事

建設業者決定され、来年3月竣工予定で工事中です。

慶 弔

弔 事 (お悔み申し上げます)

繁澤健夫 (農工24) 同窓会副会長

伊藤金得 名誉教授

丹下 勲 名誉教授

事務局だより

▼13年度版会員名簿出来と配布

4年毎に更新される会員名簿平成13年度版が出来、上記掲示板の基準に従って会費納入済みの方々に無償でお送りしています。

先回の名簿9年度版では、掲載全会員数(正会

員、準会員、賛助会員、特別会員)4万1千名に対し、今回は4万5千名の多きに達しております。

会費未納の方は、同封の振込票(手数料同窓会負担)にて納入していただければと存じます。

また、不明者の方々の消息がおわりの場合には、お手数ながら、同窓会事務局までご連絡いただきたくお願いいたします。

▼「農工通信」用原稿についてお願い

昨年来、「農工通信」への各位からのご投稿原稿につきまして、字数の上限などをお願いしてまいりました。ご協力頂きました結果、より多くの会員の方々に紙面を割くことができるようになりました。まことに勝手ではございますが、ご理解のうえご協力頂きたく存じます。

略記しますと、

①部会、支部、クラス会だより：本文0.25頁(400字+写真等1葉)

②論説、レポート等：本文1頁(1,600字+写真等1葉)

③随想、短報、紀行等：本文0.5頁(800字+写真等1葉)

を基準としてご協力頂きたく存じます。

なお、同窓会会務報告等は必要十分な情報を従来通り報告させていただきます。

▼同窓会事務局、年末・年始休業のお知らせ

本年の年末・年始休業は、平成13年12月25日～平成14年1月8日とさせていただきます。

編集後記

本号の「あいさつ」にもありましたように、国立大学では、近い将来の法人化に向けて再編・統合の議論が行われています。この内容につきましては農工通信の紙面で、同窓生の方々にも情報をお知らせしていこうと考えています。

皆様が良いお年を迎えられることをお祈り申し上げます。(蜷木 理 記)

農工通信 第68号

平成13年(2001年)12月1日

発行所 東京農工大学同窓会

連絡先 〒183-8509東京都府中市幸町3-5-8

東京農工大学同窓会事務局

<TEL 042(364)3328>

<FAX 042(335)3500>

e-mail:dosokai@cc.tuat.ac.jp